

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13375

研究課題名（和文）石刻史料を用いた唐代武官の包括的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of military officers in the Tang Dynasty using stone-carved historical materials

研究代表者

速水 大（HAYAMI, Dai）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：60810497

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年続々と報告され、1万3000点を越えたとされる唐代の石刻史料を用いて、従来曖昧であった唐代の武官の位置づけについて研究を行った。石刻史料に見える任官記事を整理したデータベースの作成を企図し、その基盤を整えた。そして、当時の武官の活動の一事例として、安史の乱の時期に安禄山・史思明側の将軍として活動した阿史那承慶について、子の阿史那明義の墓誌と史書の記述をもとに明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

唐代墓誌にみえる任官データベースは期間内に完成させられなかったが、その基盤を作ることができた。現在も作業を継続しており、可能な限り速やかに完成、公開したい。公開できれば、研究者の基礎的な資料集となることは間違いない。

また、中国の研究者との学術交流によって、公開間もない「阿史那明義墓誌」の画像の提供を受け、その内容を紹介した。阿史那氏は突厥の王族であり、異民族の王族出身者が唐の節度使にどのように組み込まれたのか、また、安史の乱の勃発後、安史政権でどのように活動したのかを具体的に明らかにした。阿史那氏という象徴的な異民族の首長の動きを明示したことは、安史の乱における蕃将研究のモデルケースとなる。

研究成果の概要（英文）：I studied the positioning of military officers in the Tang Dynasty, using more than 13000 pieces of stone-carved historical materials of the Tang Dynasty. He planned to create a database of the articles on appointments to government posts in the stone-carved historical materials, and laid the foundation for it.

Then, as an example of the activities of military officers at that time, I revealed Ashina Chengqing "阿史那承慶", who was active on the side of An Lushan "安禄山" and Shi Siming "史思明" during An-Shi Rebellion, based on the epitaph of his son ASHINA Mingyi "阿史那明義" and descriptions in history books.

研究分野：中国隋唐代史

キーワード：中国史 唐代史 石刻資料 唐代墓誌 武官 官僚制

1. 研究開始当初の背景

古代日本の制度や文化に大きな影響を与えた中国の隋唐王朝(581~907)の研究は一見、活況を呈しているかに見える。なかでも石刻史料を用いた研究は盛んだと考えられがちである。編纂史料に見えない人々や事件を研究する際に活用され、特に当時の異民族や節度使の状況の解明に寄与しているからである。しかしながら、それらの研究は特定の事件や異民族という個別具体的な研究に止まっている。客観的な指標が存在しないため、それぞれの研究対象の唐代社会に対する影響を過大に評価してしまう嫌いがある。現在では少数であったはずのソグド人や突厥などの異民族が軍事的な中核として、唐を動かしていたかのように考えられつつある。唐の軍隊の大部分が「漢」人によって構成され、指揮官が「漢」人であったことは考慮されていない。特定領域の個別具体的な研究だけが肥大化し、偏った唐代史像が形成されはじめていたのである。このような状況に至った原因の一つは、隋唐政権の大多数を占め中核を担った官僚層に関する研究が十分ではないことにある。特に武人官僚に関する研究の欠乏は喫緊の課題である。

古来、唐代の官僚研究は大きな成果を上げている。しかし、それは政治を担当した文官を中心としたもので、武官の研究は十分ではない。政治と軍事は国家運営の両輪であり、その一方をないがしろにしたままでは、時代の特質を明らかにすることは不可能であろう。唐律令制時代の文武官の定員は約1万5000人とされるが、その半数を占めた武官の研究が不十分なままでは、唐政権の実態を解明したとは到底いえないのである。

具体的な問題として、唐代の中央武官の任官状況すら満足に把握できないという現状がある。そして、一般的な武人官僚が、どのような社会集団に属していたのかという点すら明らかではない。代々武官を排出する世襲的な家柄が存在したのか。それとも、一般的な官僚の家柄から時折武官が現れるのか。もしそうだとしたら、武官はその一族の中でどう位置づけられていたのか。さらには、軍功による登用が主な任官ルートで一代限りのものが多かったのかなど、その姿は明らかになっていない。

制度の面でも解明しなければならない問題は多い。まず、唐代の中央武官の勤務実態がほとんど明らかになっていない。さらに、武官の品階の価値がどのように推移したのかが判明していないため、たとえ官職を持つことがわかっている人物でも、官僚の中での地位が判然としないのである。このように多くの重要な問題を含みながらも、唐代武官の研究は手付かずのまま残されてしまっていた。

2. 研究の目的

唐の武官の研究が進まない原因は多岐にわたるが、その一因として、編纂史料に記述が少ないことが挙げられる。史書編纂において文官の事迹が重視されるのに対して武官の功績が軽視されたためだと考えられる。例外は、別格の軍功を挙げた場合と安史の乱以後の節度使就任者の記録だけである。そこで積極的に利用したいのが石刻史料である。特に碑刻と墓誌は、多くの武人官僚の記載を残しており時代の特性を検討するうえで、格好の史料となる。

唐において主に官僚およびその家族(以後、官僚層と呼ぶ)が墓誌を作成した。現在、唐代の墓誌は大型資料集に載せられたものだけでも、約12000点以上の存在が確認されている(氣賀澤保規編『新編 唐代墓誌所在総合目録』汲古書院、2017年、以下、『新編墓誌目録』と略す)。しかも、現在も日々発見が続いており、すでに唐代の墓誌は、15000件を超えているものと考えられる。これらの墓誌をすべて分析すれば、当時の官僚層について多くの知見を得ることができる。しかしながら、従来の官僚研究はその一部分を扱っているに過ぎないという問題がある。石刻史料を唐代武人官僚研究に活用すれば、これまで曖昧なまま見過ごされてきた問題を必ず明らかにすることができる。そこで本研究では、編纂史料とともに石刻史料を網羅的に活用することで、唐代武人官僚がどのような人々によって構成され、どのような活動を行い、どのように位置づけることができるのかを明らかにすることで、従来とは異なる政治と軍事を相対化した新たな唐代史を構築する。

3. 研究の方法

唐代の中下級武官の任官状況を把握するために、唐代の墓誌を中心とした石刻資料から任官記事を抽出したデータベースを構築する。データベースの構築後、各武官職の各時代の就任状況を整理けんとうするで、任官状況の推移をあきらかにする。一方で、象徴的な武官の官歴を追うことで、該当時期の武官の置かれた位置づけをあきらかにする。

また、戦勝報告である露布を分析し、唐代の節度使体制確立期における部隊編成を検討し、当時の部隊指揮官の就任状況あきらかにする。

さらに、唐の官僚の経済基盤の一つである官人永業田の名目による大土地所有について、その実態を解明するために、石刻資料と、出土文書を利用して、同じく大土地所有を経済基盤とした仏教寺院の事例を検討し、唐代の大土地所有実態に迫る。

4. 研究成果

本研究の成果として、特に以下の4編の論文と2回の学会報告を挙げたい。

まず、唐代の武官とその軍事行動に関する論文3本と報告1回について内容の概略を示す。

(1) 論文「開封繁塔建立と宋初の江南の帰順」(千葉正史主編、竹内洋介、速水大編『中国史研究と史料利用の現況 漢籍・石刻・トウ案』(ACRI Research Paper Series 13) 2020年)

宋代創建の開封の繁塔の石刻寄進題記を分析し、繁塔の竣工時期を推定したうえで、五代末宋初の江南の軍閥陳洪進と呉越国の宋朝帰順の状況を明らかにした。石刻題記からは、両者が宋への帰順の前段階として宋朝にゆかりのある仏教施設の造営に寄進していたことを明らかにした。

(2) 論文「開元二三年の突厥の「東下」と唐の情報収集」(金子修一先生古稀記念論文集編集委員会編『金子修一先生古稀記念論文集 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序』、同編集委員会、2020年)

唐張九齡『曲江集』所載の賀状の分析を中心に、唐開元23年に起こった突厥の契丹攻撃に関する唐朝の情報収集と意志決定の過程を明らかにした。当時の突厥の攻撃の状況を知るために唐は突厥・渤海など国家の外交使節による情報の提供、外交使節、戦闘指揮官の情報収集など、各層において情報を集めそれを唐の朝廷が詳細に把握していたことがわかった。また、重要な情報提供者に対する尋問は、節度使や皇帝自らが行うことがあったことも明らかとなった。

本論文の内容を中国において講演し(「唐開元23年突厥“東下”与唐廷的収集情報」(集賢講堂(第301講) 2019年9月11日 陝西師範大学 歴史文化学院)) 好評を得た。

(3) 論文「安史の乱における突厥王族阿史那氏の動向 洛陽出土「大燕阿史那明義墓誌」とその関連資料を中心に」(氣賀澤保規編『隋唐洛陽と東アジア』法蔵館、2020年)

新出である該墓誌から安史の乱前後の突厥王族の阿史那承慶・明義父子の動向をまとめたものである。両者は唐と安祿山が建てた燕において、武官として活動し、とくに父の承慶は最終的に燕で宰相の待遇を得る。その事跡を追うことで戦乱の時期に異民族の武官が国家の中樞に登る過程を明らかにした。

本論文も、浙江大学で講演し、その結果、講演終了後、中国語翻訳の申し入れを受けた。現在翻訳中である。

(4) 学会報告「唐開元20年代初頭の幽州地域における軍事行動と軍功問題」(遼金西夏史研究会大会2022年3月)

唐の開元21年の対契丹戦の戦勝報告書である「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」を分析した。その結果、当時の戦勝報告には軍功に関する虚偽報告が含まれていた可能性が高いことを指摘した。考察の過程で、墓誌史料を利用することで、従来不明であった都督府の位置を比定することができ、武官の人物比定を行うことができた。当時の幽州節度史軍には種々の蕃族が配置されていることをあきらかにした。

研究を行っている際に、唐代官僚の経済的基盤であった大土地所有について検討する必要があることに気がついた。そして、その大土地所有は、規定の上で当時隆盛を極めた仏教寺院の経済基盤とも共通することがわかった。そのため、唐代官僚の経済基盤を解明する準備として仏教寺院の土地所有に関する研究を行い、1本の論文を公表し1回の学界報告を行った。

(5) 論文「嵩岳少林寺碑」碑陰「貞觀六年コウ氏梟牍」の発給経緯」(『東アジア石刻研究』9、2022年)

「嵩岳少林寺碑」の碑陰に刻まれた当時の行政文書である「貞觀コウ氏梟牍」の分析を通して、唐の建国期における軍功と賜田の関係について考察した。その過程で、唐初に寺院に「口分田」が給付されたとの説には再考が必要であろうとの結論に至った。

(6) 学会報告「唐代的寺籍 以 IOM RAS 所蔵 SI kr. 654 為中心」(陝西師範大学主催「古文獻学国際青年学者研討会」2022年10月)

ロシアサンクトペテルブルクの IOM RAS 所蔵の唐代寺院文書である「SI kr. 654」を、これまで発見されていた僧籍や寺院手実という類似する文書と比較することで、「寺籍」という寺院の僧尼の人数と所有する土地の帳簿であることを明らかにした。また、僧尼に給田された土地は口分田であったとの通説は正しくなく、僧尼には永業田が給田されていたことを明らかにした。

武官と軍事行動に関する研究では、個々の事例を掘り下げて研究することで、当時の武官の具体的な状況をあきらかにすることができた。一方、寺院の土地に関する研究は、唐代官僚が永業田の獲得と継承、賜田の獲得により、律令の枠内で大土地を所有できた可能性が高いことを示唆

する。官人永業田と勲田の関係など、官僚の土地所有に関する今後の研究の基盤となると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 速水大	4. 巻 9
2. 論文標題 「高岳少林寺碑」碑陰「貞觀六年コウ氏県牒」の発給経緯	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東アジア石刻研究	6. 最初と最後の頁 74-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 速水大	4. 巻 23
2. 論文標題 書評 岡部毅史著『魏晋南北朝官人身分制研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 速水大	4. 巻 -
2. 論文標題 開元二三年の突厥の「東下」と唐の情報収集	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金子修一先生古稀記念論文集編集委員会 編『金子修一先生古稀記念論文集 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序』	6. 最初と最後の頁 367-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 速水大	4. 巻 -
2. 論文標題 開封繁塔建立と宋初の江南の帰順	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉正史主編、竹内洋介、速水大編『中国史研究と史料利用の現況 漢籍・石刻・トウ案』（ACRI Research Paper Series 13）	6. 最初と最後の頁 39 - 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 速水大	4. 巻 -
2. 論文標題 安史の乱における突厥王族阿史那氏の動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 氣質澤保規編『隋唐洛陽と東アジア』法蔵館	6. 最初と最後の頁 115-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 安祿山と史思明の「神話」
3. 学会等名 内陸アジア出土古文献研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 唐開元20年代初頭の幽州地域における軍事行動と軍功問題
3. 学会等名 遼金西夏史研究会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 唐代勳官と「官人身分」
3. 学会等名 東洋大学アジア文化研究所2020年度第1回研究例会 (Zoomによるオンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 唐初の石刻資料と「均田制」
3. 学会等名 第12回東アジア石刻研究会（於：明治大学、Zoomによるオンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 「大燕阿史那明義墓誌銘」与阿史那承慶：安史之乱中の突厥王族
3. 学会等名 浙江大学“求是”學術講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 唐開元23年突厥“東下”与唐廷の収集情報
3. 学会等名 集賢講堂（第301講）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 速水大
2. 発表標題 開元23年における突厥と契丹の戦闘に関する唐の情報収集
3. 学会等名 金子修一先生古稀記念シンポジウム（国史学会5月例会）東アジアにおける皇帝権力と儀礼（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 氣賀澤保規編著 速水大他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 392
3. 書名 『隋唐洛陽と東アジア 洛陽学の新天地』	

1. 著者名 金子修一先生古稀記念論文集編集委員会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子修一先生古稀記念論文集編集委員会	5. 総ページ数 596
3. 書名 金子修一先生古稀記念論文集 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序	

1. 著者名 千葉正史主編, 竹内洋介, 速水大編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東洋大学アジア文化研究所	5. 総ページ数 74
3. 書名 中国史研究と史料利用の現況 漢籍・石刻・トウ案 (ACRI Resarch Paper Series 13)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 第12回東アジア石刻研究会	開催年 2021年～2021年
-------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------